

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「現代外交の変容：中央アジア、カザフスタン

－外交官の視点」

クルマンセイト・バトルハン

氏名	クルマンセイト・バトルハン
学位の種類	博士(学術)
報告番号	乙第41号
学位授与年月日	平成28年9月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	「現代外交の変容：中央アジア、カザフスタン—外交官の視点」
論文審査委員	(主査) 教授 平川 均 (副査) 准教授 梶原 景昭 (副査) 教授 柴田 徳文 (副査) 客員教授 田中 哲二

現代外交の変容：中央アジア、カザフスタン—外交官の視点

クルマンセイト・バトルハン
(Batyrkhan KURMANSEIT)

要 旨

今回提出した学位請求論文は、現役の外交官として母国カザフスタン共和国の外交に一定期間従事したなかで、現在の「外交」における大きな変化にどう対応して行くのか、またこうした変化の本質はなんであるのかを試行錯誤する過程で作成したものである。本論文の目的は、起こりつつある変化の現状を記し、その背景や性格をできるだけ明らかにし、現在と近い将来について、ささやかな見通しについてコメントを行うことである。

カザフスタン共和国がソヴィエト社会主義連邦共和国から独立してようやく25年、当然「新生カザフスタン」と呼ばれてよいほどの短い年月ではあるが、一外交官として私は現代的变化のなかに突然放り込まれた。カザフスタンは未だ国家として十分に用意の整わぬまま、情報化やグローバル化といった地球大の大変動に対峙せざるをえない状況が続いている。そうした新生国家の体験は、いささか個人的な感慨に踏み込むが、外交に従事する一個人のささやかな軌跡とも重なるものであり、また中堅外交官として私の体験も相対的に若い世代に属し、変化にとまどうよりも、むしろ電子媒体や越境に親近感をもつ世代のバックグラウンドを有していることもあって、伝統的な外交理論では捉えがたい感想を生んでいる。私の視点の背景にはカザフスタン固有の歴史、政治状況

の影響と、逆にグローバルに接続する現代世代の感覚という二つの要素が混交しているといっておかろう。私の立ち位置と、まだよくは知られていない故国の状況を多少とも明らかにするために、少々遠回りしたことにご理解を頂ければ幸いである。

なお本論文は、外交史、外交理論にその中心を置くものではなく、といって外交交渉の実態やプロトコルの研究でもない。むしろ現在の外交実践の日常に、課題として、あるいはその実際のルーティーンにどのような現象が生起しているかに注目し、諸現象を記述し、ささやかなコメントを加えたものである。

職務上の制約もあり、生々しい外交現場の実相をとり上げることは予想以上に困難であった。そのため資料として、学術書、一般書に加えて、現在の外交をよく伝えられている電子媒体を広く利用している。この点についてもご理解を賜れば幸いである。

さて、第1章「はじめに」では、現代の外交が直面する大きな変化について述べ、関心の所在と課題を明らかにしようとしている。

いうまでもなく、情報化の急速な進展とグローバル化という避け難い潮流が変化の大きな要因であり、それは外交にとどまらない。情報化もグローバル化もいずれも従来の国民国家の枠組みを揺るがす一方、他方ではその激しい反動として、宗教や民族などの「根源的なアイデンティティ」に基づく、ナショナリズムやサブ・ナショナリズムの「回帰的現象」をもたらしている。

外交はかつてその基盤とした、国家、外務省、外交官などの基本的アクターの確固たる構造と境界のくぐもりに直面することとなる。またこれまでの外交方法（伝達使やプロトコル、電信など）から電子媒体への大きな変化により、公館や外交官の役割にもさまざまな影響が生じている。さらに外交分野はその担い手が外務省や外交官に限られず、対外コミュニケーション、折衝についてもほかの官庁や民間企業、NGO、NPOなど多様な機関や人びとが関わりをもつ領域となりつつある。このようなアクターの多様化と分野の拡大も、外交の変容に大きな影響を与えている。

テロリズムやISに象徴されるような外交とは逆にみえる反-外交的な存在にも対応せざるをえない状況が拡がりつつあり、こうした点も従来の外交に変容を迫る一因となっている。こうした外交の地殻変化について、その諸相について述べるとともに、十分ではないにしても、変化の時代と特徴づけることができる現代世界のあり方についても触れている。

第2章「現代外交の諸問題」では、これまでの外交についての見取り図を示したうえで、「はじめに」で触れた問題についてより具体的にあらためて問題の所在を確認している。その背景には、現代世界が抱える地球的課題の大きさ（温暖化、パンデミック、大規模災害、テロリズム、難民問題、非核化）が必然的に要請する、従来の外交を超えた国際協力、強調の必要性が存在するといっておく。また非対称的な存在の増加（テロリストのように通常的外交的方法が機能しにくい相手）や、課題による専門性の深化（通常的外交政策や外交官では対応し難い）も外交の変容に大きく関わっている。大統領や首相などが、いわゆる「官邸主導」で行う「首脳外交」の拡大も、外交は外務省と外交官の専権

事項という考え方に大きな転換を迫っている。

第3章「外交分野における新技術の役割」では、とくに高度情報化や電子媒体の急速な発達外交の変容を促す現実について記し、その意味と影響を考察している。北欧諸国が試行する公館の共同運営や常駐なしの訪問外交官制についても触れている。こうした動向をもって外交官という職業が消滅するとは断じることはできない。しかし外向やアクターの多様化やIT利用のある程度の「自宅勤務」の拡がりは、現代の仕事環境の変化とも結びつく現象であり、外交ひとりその埒外にあるものではない。情報化はその効率性や利便性といった利点もあるものの、他方ウィキリークスによる「暴露」や外交機密のハッキングなど負の側面をもつ。また民主化と透明化という点でさらなる情報開示は慶ばしいことであるが、従来の外交情報を一部の当事者が抱え込むことが難しくなりつつあることも指摘している（一部では情報化や開示の趨勢に対して必要以上の機密保持に走る退行現象も生じているのだが）。

こうした紆余曲折はあるが、従来と較べて外交が市民社会の視線にさらされ、より民主的な過程に収斂していく度合は確かに高まっており、この点も情報化が外交に変化をもたらすモメントになっていることの証左である。

第4章「国際関係における教育の役割」は、これまでに述べた外交分野の「拡がり」の顕著な例のひとつである。留学を中心とする国際教育交流は、多くの国々の政策として、また国際ビジネスとしても、ますますその存在感を高めている。多くの留学生を集めることは、当該国や教育機関のイメージ・アップに繋がり、ソフト・パワーの重要な構成要素といってよい。育成人材はかつてのように送出国に戻って母国の発展に寄与するだけでなく、留学先に留まったり、第三国に移って、いわゆるグローバル人材として技術革新やグローバルビジネスの第一線で活躍する。

対外窓口としての外交や外交官はこれまでも国際協力交流と無縁であったわけではない。国際学生の増加は特恵的な留学査証の新設や在外公館の文化、教育担当官の増強など従来の外交の枠を拡大する。けれども国際教育交流はひとつの包括的政策パッケージとして、外交当事者以外のさまざまなアクターを招集する、幅ひろい視野のもとでこそ成功する。こうした分野に外交がどう積極的に関わってゆくかも大きな課題である。

第5章「文化外交と民間外交の重要性」は、ここまでの議論の延長線上にある。すなわち、外交アクターの多様化と外交分野の拡大（文化外交が旧来の外交において絶無であったということではないが）が本格化し、それが外交の質にも転換を迫っているという現象のことである。

文化政策や文化外交は、ソフト・パワーの認識が拡がるにつれ、旧来の外交当事者の枠を超えて、対外関係の有力な領域となっている。狭義の軍事力や経済力ではなく、一国のライフ・スタイルや芸術、ポップ・カルチャ、教育、知力などが、その国の魅力となり、外部からの憧景の源泉となり、文化力として当該国のイメージを高め、外交に資するということである。地球環境への取り組みや、人権や福祉、民族、宗教の多様性の承認なども広い意味でソフト・パワーと関わる。

さらに国家や通常的外交機関が見過ごしてきたような、眼の届かない問題に対処するうえで NPO や NGO、あるいはそのほかの民間、公的な機関の外交役割についての認識も高まってきた。これらは対外関係に大きな力を発揮するものであり、従来の外交に変容をもたらすようになってきている。

第 6 章「カザフスタンの国際社会における外交実績」と第 7 章「カザフスタン外交の軌跡と自らの関わり」は前章までといささか趣を異にする。とはいえ、この 2 章は私が一外交官として外交の現在を考察する際の原点といってもよいものである。こうした国の歴史的背景や個人的な関わりは直接、間接に私の外交観に少なからぬ影響を与えている。

第 6 章では、新生カザフスタンの特徴といえる、非核政策、環境問題への対応、宗教間対話などの新しい試みについて述べている。これらはカザフスタンの地政学的な位置を踏まえ、現代の新たな外交課題に対する広い外交枠組みをもってする試みといえよう。こうした取り組みはかなりの程度、現代外交の変容を反映しており、新しい外交環境そのものの発現といってもよい。ソ連邦からの独立は、残存する核施設や核兵器にどのように対処するかという課題であり、また複数の国家に及ぶアラル海やダリア河の汚染と水量喪失の改善、そして周辺諸国にとっても喫緊の宗教的原理主義の抑制と相互理解という諸課題との対峙と諸問題のソリューションの必要性をもたらした。こうした困難な状況のなかで、カザフスタン外交は自ずと新たな外交枠組みを構築せざるをえなかったのである。それとともに幾多の課題に直面するうちに、対処方法の進展は、グローバル課題解決の方法のひとつとして国際的にも注目を浴びるようになった。

第 7 章は、カザフスタン外務省の意外な始まりとソ連邦時代のカザフ人ソ連邦外交官の活躍についての秘話的物語を紹介し、そうした背景のなかで私が外交の分野に参入する経緯について記している。

第二次大戦後の国際連合の設立を見定めてソ連邦は所属する共和国をそれぞれ国連加盟国としようと、戦時中から攻勢をかけていた。その結果として実質はないものの、カザフスタン外務省は当時新設（といって大臣は兼任、省員は有名無実）されている。またソ連邦からの初代サウジアラビア大使はイスラム教徒であるカザフ人（離任後スターリンの粛清にあって刑死、その後サウジとソ連邦は外交断絶）であったという逸話についても紹介している。

第 8 章「おわりに」では、ささやかな結論として、大国間のみで解決できない地球課題の増加を眼前にして、「地球益」を重視し、普遍と個別のバランスのとれた、多様なアクターを包括する新たな外交の重要性を確認している。

氏名	クルマンセイト・バトルハン
学位の種類	博士(学術)
報告番号	乙第41号
学位授与年月日	平成28年9月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	「現代外交の変容：中央アジア、カザフスタン—外交官の視点」
論文審査委員	(主査) 教授 平川 均 (副査) 准教授 梶原 景昭 (副査) 教授 柴田 徳文 (副査) 客員教授 田中 哲二

論文審査結果の要旨

2016年8月29日

博士（論文）学位請求論文の審査結果報告書

主任審査員 国士舘大学大学院グローバルアジア研究科 平川 均



審査員 国士舘大学大学院グローバルアジア研究科 梶原 景昭



審査員 国士舘大学大学院政治学研究科 柴田 徳文



審査員 国士舘大学大学院グローバルアジア研究科（客員教授）

田中 哲二



1. 提出論文

現代外交の変容：中央アジア、カザフスタン—外交官の視点
（英語 *Vicissitude in Diplomacy Today: A Diplomat View Point from
Kazakhstan, Central Asia*）

提出者：クルマンセイト・バトルハン（Batyrkhan KURMANSEIT）

博士請求論文受理及び資格検定免除承認：2014年9月18日

（国士舘大学学位規定第14条に基づき、大学院グローバルアジア研究科委員会において、すべて免除を承認する）

事前審査	:	2015年9月1日
審査会	:	2016年8月9日
口頭試問会及び公聴会（最終試験）	:	2016年8月20日
審査会	:	2016年8月20日
最終提出日	:	2016年8月29日

2. 論文要旨

本学位請求論文（以下、本論文という）は、以下の構成から成る。

1. はじめに
2. 現代外交の諸問題
3. 外交分野における新技術の役割
4. 国際関係分野における教育の役割
5. 文化外交と民間外交の重要性
6. カザフスタンの国際社会における外交実績
7. カザフスタン外交の軌跡と自らの関わり
8. おわりに

本論文は、大きな変化に見舞われつつある現代の外交について、自らの外交官としての体験を踏まえ、また関連文献および電子媒体による関連情報も活用して、外交の具体的な状況を記し、その変容と課題の実態を明らかにしようとしたものである。

まず、第1章「はじめに」で筆者は現代世界を覆う、グローバル化と高度情報化という二大潮流を前にして、それが現代の外交に与える影響とその結果としての変容について述べ、本論文が取り扱う課題と問題の所在を明らかにしている。

急速なグローバル化と情報技術の発展にともない、いずれの国家においても従来からの国民国家の概念が揺らぎをみせているが、新興国家の置かれた現代的状況は、古典的な意味での国民国家を形成する以前に現代のグローバル状況の中に投げ込まれたような様相を呈するものである、というのが著者の出発点となっている。

これまでの伝統的な国家外交、あるいは外交の担い手としての国家や公的機関としてのいわゆる外務省、そして外交官という担当者の存在は、著者によれば、消滅することはないにしても、大きな変化の渦中にある。その原因にはいくつかの背景、理由が存在しており、著者はそれを以下のように示している。

まず冷戦の終焉以降の新しい国際秩序のあり方（あるいはその過渡的な不安定性）である。東西対立が一応終焉し米合衆国の一強体制が成立したかにみえた瞬間に様相は一転し、冷戦後の国際秩序が確立しないまま、分散化、多極化が進み、見通しのつけ難い状況が続いている。

またこの10年余のグローバル化の進展は、一面では国民国家の存在感を薄め、他面では宗教や文化、あるいは民族性を強調するさまざまなナショナリズム、サブ＝ナショナリズムの波を予想以上にわき立たせている。国境の壁が低くなり、グローバルな一体性や相互依存は一定程度深化したいっぽう、原理主義や過激派によるテロリズム、民族紛争の激化がみられる。いわゆる非対称的な戦闘や従来の外交言語が通じ難い事態が頻発している、という。ちなみに、こうした著者の状況認識は妥当なものであろう。

さらに急速かつ全地球的な情報化、市場化は国際標準という均質化をもたらす一方、

分散化、多極化を促し、デジタル・デバイドや経済格差を拡大化させてもいる。

加えて、地球規模の問題群の緊急性と集中化は、一国外交や二国間外交の枠を超えて、全球的な対応を要請するようになってきている。非核化、温暖化、パンデミック、大災害、国際テロリズム、難民などの課題は従来からの外交課題であるが、それだけではとうてい対処できないような拡がりやインテンシティを国際社会に突き付けている。こうしたこともあって、従来からの外交アクターに加えてその他の専門機関や専門家の参加が必然となり、さらにNGO、NPOなど「官」ではない外交アクターの登場が必須となっている、と著者は外交の変化のひとつの柱を指摘している。

第2章「現代外交の諸問題」では、伝統的な外交の在り方、変化の渦中にある現代の外交をめぐる新たな課題の確認がなされる。本章において伝統的な外交の定義、専門的な外交官の意義とその限界、および課題が確認され、またサイクス=ピコ協定に代表されるヨーロッパの大国による恣意的な国境の策定によって生み出された非対称な国家にも目が向けられている。さらに、現代の外交に変化を迫るグローバルな状況と外交の多様化に焦点が当てられる。第3章では、とくに高度情報化が及ぼす大きな影響について考察がなされている。そこでは情報化が従来の外交機能に新しい要素を付加し、また情報コミュニケーションの進化によって外交官の必要性の有無すら議論の俎上に載せられている現実が指摘される。また、外交公館の共同運営や新しい国際協調の枠組みの構想が生れたことについても触れている。

情報化がもたらす外交技術の変化、さらにそれが社会・思想・行動様式に与える変化については、次のように論考する。情報化は分散性を高め、一般人にも情報へのアクセスを可能にし、外交の公開性、透明性の拡大に大きく作用している。それはまたウィキリークスに代表されるような情報の「暴露」や「拡散」、さらには外交機関に対するハッキングを招くところまで及んでいる。外交が市民社会の民主的な「視線」を意識せざるをえない状況となっていることは、これまでの外交に変容を迫る事態であると、著者は変容のひとつの様相を呈示している。

第4章「国際関係分野における教育の役割」では、第3章の考察を受けて外交の拡がりやこれまで他分野とみなされてきた領域と外交との新たな（あるいはより拡大した）繋がりについて述べられる。そのひとつが留学を中心とした国際的な教育交流である。

国家イメージの喚起や優秀な人材確保に通じる国際学生の招致はこれまでも一国の国際関係に大きな影響を与えてきた。今日のグローバル人材獲得の必要性や国際標準の設定の重要性を鑑みるに、国際教育交流は新たな外交の主要な任務のひとつとしてこれまで以上にその地歩を固めている。同時に国際教育交流は、外交官や外務省にとどまらぬ外交アクターの多角化、多様化をも促す要因ともなっている。こうした著者の指摘は、従来の外交領域にさらなる活動を付加するものであり、それは政治、経済にややもすると焦点を置いてきた、これまでの外交の枠を拡げる方向性を捉えているものとして評価できる。ちなみに、このことは従来の外交当局の活動を拡大することにもなるが、

教育交流機関などの新たなアクターを外交の重要な担い手として参入させることにもなる。

国際教育交流は大学や民間の協力も含めて、ひとつの政策パッケージとしてはじめて成立する。本論文では、さらにこうした外交の多様化の顕著な事例あるいは領域として、次章第5章での文化外交と民間外交の考察が置かれることになる。教育もその一部としてひろく文化に関わる対外関係は、いわゆるソフト・パワー醸成の重要性を浮き彫りにする。安全保障や経済力は一国の外交にとって依然として最重要の課題であるが、それに劣らずソフト・パワーの醸成は当該国の存在感を高め、憧れや親しみを生み出す源泉としてますます意味をもつようになっている。高文化（芸術）、先端研究、教育交流のみならず、ポップ・カルチャーの輸出や旅行客の誘致も、ソフト・パワー形成のうえで欠くことができない。

第5章「文化外交と民間外交の重要性」は、上述の諸点に触れ、さらに民間外交の今日的な意義について述べる。国境を超えた地方と地方の結びつき、住民間の交流、NPO、NGOの多面的な活動、これらの活動は、従来の外交が取り残した課題や対処しにくい外交領域に新たなソリューションの可能性をもたらしている。このような領域も現代の外交分野を考える場合にははずすことができないであろう。他国の小共同体の人びとのニーズは、国家レベルの直接の交渉や努力とは馴染みにくく、むしろ「草の根」的な地道な活動によって、よく汲みとられ、問題解決に至ることが多いのである。

本論文は、先ず以上のような今日的外交の変容と今後の展望について論じている。しかし、こうした点はおそらく多くの外交従事者によっても認識される「普遍的」な状況把握と問題点の指摘といってよいかもしれない。また著者の経歴や背景とは直接関係しない、むしろグローバル化と情報化が進行する、きわめて現代的な世界を体現する国際標準の若手（いや中堅）外交官の視点であろう。

ところが、単純な国益偏重や特権意識とはあまりにかけ離れ、客観的に世界を展望する視点に立ったここまでの論述は、後続の2つの章によって新たな内容が付け加えられる。それは「普遍」と「個別」が錯綜し化学反応を生ずるような、特別の結ばれ方である。すなわち個別的な民族、国家、社会、歴史の背景をもち、同時にグローバルな世界、外交集団の一員であるという立ち位置が、著者にこうした視座を可能にさせたように思われる。

第6章「カザフスタンの国際社会における外交実績」と第7章「カザフスタンの外交の軌跡と自らの関わり」は、自らがその一員として携わってきたカザフスタン外交に関するものである。本論文のテーマから一見外れるようにもみえるが、上述のようにその意義は逆である。独立後まだ年若い国家でありながらいきなり現代的変容の中に投げ込まれたカザフスタンの直面する主要な変化と課題が考察の対象である。

本章では、カザフスタンが行った、非核、環境、宗教対話など旧来の外交の枠を超え、また中央アジアの一国としての地政学的な特質を生かした新たな外交取り組みの一端

が示され、カザフスタン外交の新機軸と国際社会への重要な貢献が明らかにされている。この点は貴重な報告であり、日本ではまだまだ認識不足のカザフスタン共和国およびその外交に関する新たな知見の紹介として優れている。第7章では、知られざるカザフスタン外交の歴史についてのきわめて興味深い情報が提示されている。第二次世界大戦後の国連の構成国としてソ連邦は、その傘下の共和国をメンバーに加盟させようとして名目上の各共和国外務省を設けた事実である。この指摘はカザフ・ソヴィエト共和国外務省の誕生に関わる貴重な証言である。またソ連邦外交に参画したカザフ人外交官の記述も貴重な報告といってよい。こうした歴史を有する新生カザフスタン外交に著者が参加する経緯についても興味深い記述がなされ、本論文の視点と方向性の淵源を辿ることができる。

第8章「おわりに」では、大国間の調整のみによって問題解決を期すことが困難となりつつある現代世界を踏まえたうえで、外交が変わらざるを得ないことがあらためて指摘されている。また外交従事者のことばを紹介しながら、外交における「人」の重要性、多様な文化環境の認識、国益を越えた「地球益」の視角などを提示し、今後の外交を展望している。

3. 審査結果

本論文は、さまざまな変化の影響のもとで、現代の外交が、すぐさま縮小するのではないが、大きな変容を迫られており、それらの変化の要因について、外交現場での経験も踏まえて、その実情を記述、論評したものである。

こうした変化の背景でもっとも基本となるのは、外交に限らずさまざまな分野で激しさを増している、分野そのものの「揺らぎ」にほかならない。国民国家という概念、形式も、グローバル化や高度情報化によって従前とは異なった様相を呈している。外交もまさに例外ではなく、その境界線には大きな変更が及んでいる。

この点は、本論文のあり方、傾向にも反映されている。すなわち本論文は、特定分野を越えた学際的研究であり、またそれは本論文著者の実践的な活動と組み合わせられており、そうした意味で「脱領域」的な性格をもっている。

本論文では、現代外交の諸問題の概略的見取り図が提示され、従来の外交のあり方、外交機関、外交担当者の限界と、また外交アクターの多様化、外交環境の変化が要領よく示されている。次いで、変化の主要な要因のひとつとして、情報技術の発展に関するアップ・トゥ・デイトな現状認識が示される。さらに外交分野の複雑化や拡張として、国際教育交流、文化外交、パブリック・ディプロマシーの現代的重要性が明らかにされ、最後に著者自身が従事するカザフスタン外交の経緯と特徴への言及が行われている。

本論文の特徴と学問上の意義として、以下の5点を挙げることができる。

- 1) 外交従事者自身による現代外交のかたちと課題の指摘が実践的かつ学際的に行われており、こうした現場感覚の発露には大きな意味がある。

- 2) 今日の電子媒体情報を駆使し、今現在生起している現象に注目することで、従来の論文にないユニークな視点が存在する。
- 3) 現代外交が他分野との接続や分野横断性のなかに多面的に展開され、収斂してゆく実際がよく記述されている。
- 4) 問題の背景にある、さまざまな分野で起きている境界の「揺らぎ」という、適確な時代認識が十分に捉えられており、それは論文の形式、展開にも反映されていて、新しい形の論考として評価できる。
- 5) 従来、外交当事者による論述は、退任後の回顧録やメモワールの形式で発表されるのが殆どであるのに対して、本論文は現役の激務のなかで執筆されており、この点に意義を有する。さらに、新生カザフスタン外交の置かれた独特の地政学上の位置と、その外交担当の一員としての著者の立ち位置が独特の視座を形成している点で価値がある。いわゆる覇権や大国による秩序の狭間にあって、非核、環境、宗教間対話が自ずと外交アジェンダに採用されるカザフスタン外交の方向性が論考全般によく示されている。
- 6) 第6章、7章のカザフスタン外交をめぐる記述は、現場にいる著者による貴重な情報であり、その資料的価値は十分に評価できる。

なお、著者は本学のアジア・日本研究センターの客員研究員でもあり、他国の有為な外交官が本学と密接な関係性を構築することは、国家レベルの相互関係の展望まで含めて、大いに評価すべきと考える。反面、さらなる改善、成果の充実という点では今後、外交官としての制約はあろうが、具体的な外交事例の検証、外交関係強化のヴィジョン等についても、より分析的な研究を期待する。

以上、われわれは審査員一同の責任において、国士舘大学大学院学則第51条に基づき、慎重に審査した結果、本学位請求論文が外交現場での実践と学際的探求の総合的論究として学術博士学位授与に値するものと判定する。